

## 「わかる（理論）」と「できる（実践）」を組み合わせた体験学習の試み

- 学習者が主体的に関われる教室環境の改善 -

A Study of Combining Theoretical Learning with Practical Learning using Laboratory Method: For the Purpose of Improving Classroom Environments so that Learners Become More Independent

吉本 恵子(文化外国語専門学校)

大山シアノ(カイ日本語スクール)

### 要旨

学習者が主体的に関われる教室環境と授業改善を目指し、循環型の体験学習を教室に取り入れた。一連の授業を通して学習者は、1) 自らが主体的に動くという主体性 2) シミュレーションではない現実性を体験し 3) 自分たちで授業を作り上げていくという創造性と達成感を味わうことができたという結果が得られた。さらに 4) とにかくみんなでやってみようという協働性、5) 何かにチャレンジしてみようという試行性も生まれたように思う。

We used Laboratory Method in Japanese classes for learners to be more independent in their lesson participation. The results of the questionnaires to learners indicate that they, 1) acted more independently in their classes, 2) got practical experience from the lessons, 3) were enthusiastic about completing their studies by themselves. The learners became able, 4) to be more cooperative with each other in order to achieve their goals, 5) to challenge easily without fear of making mistakes.

【キーワード】理論，実践，循環型，体験学習，教師の役割

### 1.はじめに

学習者が主体的に関われる教室環境とはどのようなものだろうか。これまでに担当した日本語中上級クラスの中には 1) 学習者が授業には出席するものの遅刻が多く、2) 課題はどうにか達成するが、自ら積極的に学ぼうという姿勢が感じられないクラスが存在した。このように一見、倦怠感が漂うように感じられるクラスの教室環境と授業改善を目指し、循環型の体験学習を教室に取り入れてみた。

### 2.クラスの現状を把握する

なぜ、この教室の学習者は学習意欲を失ってしまったのだろうか。学期最後の授業の後で学習者に「この教室で勉強していて嫌なことは何ですか」という質問をし、アンケートをとった。すると、以下のような学習者の声が返ってきた。

「もっと話したいが、話せない」「覚えたことを使うチャンスがない/時間が少ない」

「先生中心/先生ばかり話している」「いつも同じ/変わらない」「つまらない」「クラスメートがうるさい」「クラスに非協力的な人がいる」

上記の意見を考察し、自らの授業を振り返ってみると、1)教室では「わかる(理論)」を中心とした授業が行われ、学習者の「する」または「できる(実践)」を目指した授業が行われていなかった。さらに2)教師は教える者、学習者は教えられる者となり、両者が協働的に関るといような事が少なかった。また3)教師が成人している学習者に対し過干渉であり、学習者の学習の動機付けさえ教師がしてしまったため、学習者が自ら主体的に授業に関ろうとする意欲が失われた。4)教室の運営が計画したように進まないため、教師自身も教えることへの意欲を徐々になくし、それが学習者にも負の連鎖として伝わった、などが学習意欲の喪失の主な原因だったのではないだろうか、と考えられる。

これらの振り返りから、今回は学習者がより主体的に授業に関われる教室を目指し、津村・山口(1992)が提唱した体験学習の循環的なプロセスを援用して、教室の改善を試みた。

### 3. 循環型の体験学習とは

体験学習とは、アメリカのレヴィン (K. Lewin)のグループダイナミクス理論を起源とした“いまここ”の場で起こっている生の体験を素材に用いる教育方法である(荒木 2003)。この体験をベースにした学習は、学習者自身が考え、体験し、結論を導き出すという学習者主体の教育方法で、「学び方を学ぶ学習」とも言われている(津村・山口 1992)。体験学習は一般的な知識の習得のための概念学習よりも、機能的な成果が高いという実証的研究がある(高 1998)。

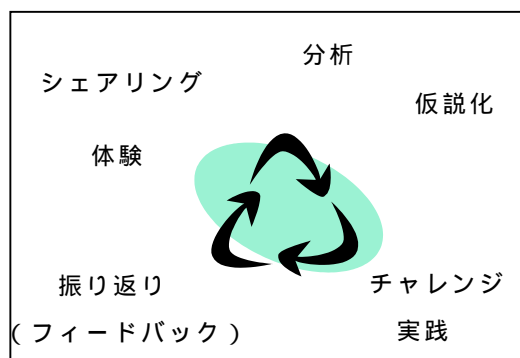
今回の試みでは、日本語の授業に体験学習を取り入れることによって、学習者が授業のなかでより主体的に取り組むようになるのではないかと考えた。体験学習というと学校以外のフィールドに出かけて行って学習活動を行うものと思われがちであるが、今回の試みでは学校の教室内で「わかる(理論)」と「できる・する(実践)」を統合した授業を行うことを目指した。そのため授業では、理論学習と体験

学習を繰り返し行う「循環型の体験学習」を試みた。また必要に応じてゲストを教室に招いたり、学習活動を校外へ移したりもした。

#### 4. 体験学習の流れ

授業では 1)テーマに合わせてテキストをグループで読む(体験)、2)読んで、そのテキストの中で何が起こったかをグループの中で分かち合い発表する(シェアリング)、3)どのように起こったかを分析し問題点を探す(分析)、4)学んだことを自分の仮説を作り文章化、あるいはポスターを作る(仮説化)、5)仮説化したものをベースに新しいことを創造するため何かプランを立ててやってみる(チャレンジ・実践)、6)実践したことを振り返る(フィードバック)という体験学習のプロセスに沿った授業を行った。そしてこのプロセスを、課題を変え循環的に何度も繰り返すことによって、学習者自身が「わかったことを実践し運用できる」、日常生活と結びつく日本語力の向上を目指した(「循環型の体験学習の流れ」参照)。

図1. 「循環型の体験学習の流れ」



#### 5. 体験学習における教師の役割

教室活動はグループに分かれて行われる。教師の役割のひとつはクラスを教室プログラムに合わせてグループに分けることである。メンバーによっては活動が意外な広がりを見せたり、停滞したりする。どのようなメンバーにするかは活動のポイントとなった。

さらにこの学習を学習者主体の自立的ものにするために 1) 学習体験ができる

教材、情報を提供し、 2) 学習の場の設定を行なった。つまり活動の枠組みを整え、授業時間内に活動が収まるよう配慮した。また 3) 一連の学習活動が円滑に進むよう学習者を援助し、 4) 学習者が明らかにミスをしている場合、学習者の学習に疑問が生じた時には、教えずにまず指摘する、の4点に留意した

## 6. 具体的な授業の例

今回の実践は、以下のように異なる二つの学校の上級クラスで行った。

### 事例 1

テーマ：日本のロングライフ商品を考える

対象クラス：K日本語学校上級クラス 欧米系学習者5人 アジア系6人

授業時間：20時間

授業内容：

- 1) スナック菓子大手A社のヒット商品についての資料を3つ、グループで読む(体験)
- 2) 1)でわかったことを話し合う。なぜ、この会社のスナックがヒットしているかグループで考えてみる(シェアリング)
- 3) このスナック菓子を食べてみる。食感、味、包装、キャッチコピーなどを検討する(体験・分析)
- 4) 学習者の母国でこの商品がヒットするか考えてみる(仮説)
- 5) 母国でヒットしたスナック菓子が日本でもヒットするか、新しいスナック菓子を考えてみる(仮説を立てる)
- 6) A社広報室を訪ねる計画を立てる。質問を考える。敬語の練習をする。すらすら言えるように繰り返し練習する。シミュレーションする
- 7) A社広報室を訪ねる。広報室スタッフの説明を聞く。あらかじめ考えた質問をする。新しく疑問に思ったことを聞いてみる(チャレンジ・実践)
- 8) 教室に戻り、A社広報室訪問についてフィードバックする(振り返り)
- 9) レポートを作る、発表する(発表・振り返り)
- 10) A社へ学習者が礼状を書く。礼状の書き方を学ぶ(今回の学習では実施できず)

この授業を通してどのような変化がクラスに起こっただろうか。まず

1) 教室ではグループで資料を読み、A社についてわかったことの意見交換をした。その後、実際にA社のスナック菓子を食べてみた。食べることによって「味、食感、におい」などが現実化され、資料で読んだ内容との比較、検討ができたのではないだろうか。その結果、次のステップの「新しいスナック菓子を考える」という教室活動に広がり生まれ、グループ内での意見交換、グループを超えての意見

交換が活発になった。さらに実際に食べることによって体験した「味、食感」に関する新しい語彙や表現が増え、覚えた語彙を使ってグループは生き生きとした会話が交わされたように思う。

2) さらにA社を訪ねることにより、教室で読んでいた資料を現場で重ね合わせる、または比較する、というリアリティーのある体験ができることになった。授業の対象であるA社広報室のスタッフとの会話は学習者のやる気を引き起こし、主体的な活動の原動力となったのではないだろうか。

3) 授業後、学習者からのアンケート調査では「体験学習が授業への興味や意欲に効果があった」「クラスで協力し合うことに効果があった」「教えられる授業から自分たちで作り上げる授業にするために効果があった」という項目で「かなりあった」との結果を得た。また、学習者からの感想としては「トップ企業の会議室で話を聞くという経験は貴重だった」「実際のビジネス現場では英語の語彙があんなに多く使われていると知って驚いた」

「緊張したけど自分の質問が通じたことが嬉しかった」などの意見が出た。

以上のように学習者のフィードバックとアンケートの結果は概ね体験学習が好意的につけ取られているが、一方でK日本語学校における体験授業では「主体的な授業もいいが、先生にもっと教えてもらいたかった」「一人で勉強した方がいいと思ったことがある」など授業への参加について消極的・否定的な意見も寄せられ、今後の教室活動への問題点となったように思う。

## 事例2

テーマ：ホスピタリティーを考える

対象クラス：B 専門学校上級クラス 中国・台湾人14名

授業時間：20時間

授業内容：

- 1) 学校行事、テーマパークBランドへの校外授業の前の事前学習として、Bランド社社長の手記を読む。(体験)グループでホスピタリティーを考える(シェアリング)
- 2) 手記からキーワードを挙げ、ポイントをポスターにする(分析)
- 3) 母国と日本のサービスの違いを比較する。長所と短所をあげる(分析)
- 4) ポスターを聞いている人にわかるように発表する
- 5) Bランドのホスピタリティーを知るため、校外授業において従業員にインタビューするプランを立てる(仮説化)
- 6) 相手に気持ちよく答えてもらえるような質問を考え、すらすら言えるよう練習する。相手がどんなことを答えるか、推測してみる(仮説化)

- 7) Bランドへ行き、インタビューをする(チャレンジ・実践)
- 8) 教室に戻りインタビューしたことを発表する(フィードバック)  
6)で推測した答えとの違いを考えてみる(分析)
- 9) 8)をふまえ、ホスピタリティーについて、改めてポスターを作る(仮説化)
- 10) 聞いている人にわかるように発表する。意見を交換する(実践・フィードバック)
- 11) ホスピタリティーについて都内Cシティーホテルの総支配人の協力を得て、事例を提供していただく(体験)
- 12) 事例研究についてグループで検討する, グループの答えを出す(分析・シェアリング)
- 13) Cシティーホテルの総支配人をゲストに招きホスピタリティーについての話を聞く事例研究について発表する・コメントをもらう(仮説化・実践)
- 14) ホスピタリティーについての一連の授業についてフィードバックをする

B 専門学校の上級クラスでは入学当初から1)クラス内に政治的文化的な背景の違いによる暗黙の対立関係が存在し、同じ国の出身者同士がまとまり、クラス内で孤立する学生が存在した。また 2)クラス内には「勝つ・負ける」という競合的な考え方をもち、自分を常に優先させ、相手を否定的に見る学生もいた。そこで、クラス内の対立を解消し、協調的な問題解決能力を育成するために体験学習を導入し、協働的な学習を可能にする教室環境を整えることを目標とした。

授業ではまず資料をグループ全員で読むピアリーディングを行った。時間の経過とともに資料を読みながらの意見交換が起こるようになり、同時にそれぞれの意見の共有・シェアリングをしている様子も観察された。ポスターを作る作業ではそれぞれのグループの個性を発揮するために活発なディスカッションが行われた。人の目を気にせず安心して自由に発言できる環境、またはメンバーとしての信頼感が活動を通して生まれてきたように思う。今回は学習者から、日本で最もサービスがよく「ホスピタリティー」が徹底されていると挙げられたBランドで、グループ別にインタビューを行う実践をした。その結果、Bランドのスタッフの質問に対する真摯な態度は学習者の印象に強く残ったようで、2回目にポスターを作った時には1)資料から読み取ったものだけではないリアリティーのある内容 2)インタビューで知った新しい情報を他の人にわかりやすく伝えようという積極性 3)役割分担をして時間を合理的に使った作業、ができるようになったと思う。

最後に都内のホテル総支配人に提供してもらった事例からそれぞれのグループが対処をディスカッションし、意見を発表し、総支配人からコメントをもらうことでホスピタリティーの一連の授業のまとめとした。

B 専門学校で行われた授業の振り返りでは下記のような学習者の記述が見られた。

質問：この授業であなたが得た収穫は何ですか。以前の自分と比べて考えてください

表1 (複数回答可) (人)

1	グループで協力すること	12
2	誰とでも気軽に話せるような経験	11
3	win-winの関係(自分も他人も一緒に~できるようになる)	10
4	聞いている人を意識し、わかりやすく発表すること	9
5	自分の意見と他人の意見を比べてみる	8
6	その他	12

#### 自由記述

- 1 読解の授業は難しいと思っていたが、グループで読むとすらすら読めて、内容も早く理解できた。キャッチフレーズを考える時間はみんなで悩んだが、出来上がったときはほっとした
- 2 教室で体験するだけでなく、実際に体験しに行ったので、もっとわかりやすくなった。人間関係とか仕事の関係でもホスピタリティーが大切だとわかった
- 3 ポスター作成発表は初めてのグループでの共同作業で、大変さを感じた反面「絆」が強くなるのを感じた。またグループでの活動はより打ち解けた雰囲気を作った
- 4 グループで作ったポスターは1回目と2回目が全然違うし、(各グループで)スタイルも考え方もまったく違うことがわかった。自分でも2回目の方がうまくできたし、意見もまとめられるようになった
- 5 社会で働いている経験豊かな人の体験談を聞くことを通して今後私たちが社会へ出て行くためのヒントをえられた。得るものが多かった
- 6 ホスピタリティーとは何か、実際に現場で働いていた方の話を聞いた。実際の場面で役立つ考えがどんどん出て来た。一番勉強になった。

B 専門学校における事例2では事例1と異なり、同一のテーマで体験学習の循環、体験、シェアリング、分析、仮説化、チャレンジ、実践、フィードバックの過程を何度か繰り返した。その結果、当初、体験学習を導入した目的であったクラス内の対立は以前より改善され、協調的な協働的学習が可能となる教室環境の基盤が築かれるのではないかと考えている(表1参照)

#### 7. 結果と今後の課題

循環型の体験学習を取り入れた授業をすることで、教室はどのように変化したの

だろうか。まず学習者は 1) 自らが主体的に動くという主体性 2) シミュレーションではない現実性を体験し 3) 自分たちでポスターやレポート、インタビューをし、授業を作り上げていくという創造性と達成感を味わうことができたのではないだろうか。さらに 4) とにかくみんなでやってみようという協働性、5) 何かにチャレンジしてみようという気持ちが生まれたように思う。また、学習者は別の課題に取り組む時にも同様の学びのプロセスを経て、積極的に教室活動に参加しようという主体性が認められたように考えられる。

今回の実践は、循環的な体験学習を通して学習者が自ら関わり合う教室環境の改善をねらいとしたが、同様に教師自身も学習者とともに体験学習のプログラムを体験した。それにより教師は 1) 学習者、教室に目を配り、授業の進行をサポートする教師の役割のみならず、学習者とともに体験学習を共有することができたのではないだろうか。(図2参照) また教師は 3) 現状を分析し、4) 教室や、学習者また教師自身が持つ問題を把握、4) それを仮説化し 5) 新しいことへのチャレンジに結びつける、というプロセスを繰り返すことにより、自らを変化させ成長させ得る、という可能性が示されたように思う。

< 教師の役割 > Tは教師 Sはサポーター 学は学習者

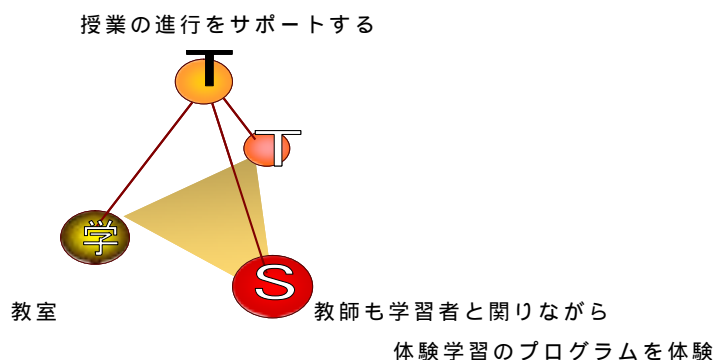


図 2

今後の課題としては、今回の事例1で明らかになった体験学習に消極的な学習者への働きかけ、事例2の課題として教師の役割について、継続的に研究を続け、協働的な教室環境の改善を目指していきたい。

最後に今回の体験学習における実践は、教師が所属する二つの学校の全面的な支援を受け実践できたこともつけ加えておきたい。

#### 参考文献



- ( 1 ) 荒木正昭 ( 2003 ) 「 高等教育における人間関係的訓練の導入と有効性の考察 - グループダイナミクス理論に基づく教育実践の試み 」 日本大学大学院総合社会情報研究化紀要 No.4
- ( 2 ) 高禎助 ( 1988 ) 「 高等教育における人間関係技能の開発に関する研究 」 鹿児島女子短期大学付属九州地域科学研究所報 5
- ( 3 ) 國分康孝・大友秀人 ( 2001 ) 「 授業に活かすカウンセリング～エンカウンターを用いた心の教育 」 誠心書房
- ( 4 ) 津村俊充・山口真人 ( 1992 ) 「 人間関係トレーニング～私を育てる教育への人間学的アプローチ 」
- ( 5 ) トレバー・コール ( 2002 ) 「 ピアサポート実践マニュアル 」 川島書店
- ( 6 ) 中野良顯 ( 2006 ) 「 ピアサポート～豊かな人間性を育てる授業作り 」 図書文化社
- ( 7 ) 吉本恵子・松井玲子・桑原里奈・小川美由紀・梨本順子 ( 2005 ) 「 サポーターの支援を受けた作文授業～サポーターとは何か 」 『 2005 日本語教育学会春季大会予稿集 』 ( 社 ) 日本語教育学会